

# 若者のレクリエーション行動からみた借楽園という観光空間

## “Kairakuen” as a Tourism Space: The Perspective of Recreational Behavior in Young Generations

有馬貴之\*・和田英子\*\*・小原規宏\*\*\*・菊地俊夫\*\*\*\*  
Takayuki Arima Eiko Wada Norihiro Obara Toshio Kikuchi

### 摘要

観光空間は人々に対して非日常性を体験させる空間であるとされている。例えば、ある地域にとって独特で特異な自然や文化は観光資源として捉えられ、日常では体験できない非日常性が観光者に提供されている。そのような一般的な観光空間の性格を踏まえ、本研究は茨城県水戸市の借楽園を事例に若者のレクリエーション行動を考察し、若者の観光空間における非日常性と日常性の関連や差異について検討した。また、本研究はレクリエーション行動をビデオカメラで調査しており、行動やそれに基づく空間把握の新たな研究方法の開発としても位置づけることができる。観光ガイドブックや雑誌の記事の一般的な傾向では、借楽園は主に梅によって非日常性を演出された観光空間として捉えられてきた。しかし、若者のレクリエーション行動を調査した結果、梅を主な対象とする非日常性は借楽園における若者の移動ルートや視線には認められたが、それは春のみに限定され、秋では日常的な資源が若者の観光空間を大きく性格づけていた。さらに、若者のレクリエーション行動の最中における会話を分析した結果、会話は春と秋ともに梅の非日常性に大きく依存することはなく、日常的な会話が多く交わされていた。これらの結果から、本研究では、若者のレクリエーション行動は所与の観光資源を受身的に享受するのではなく、自ら新たな資源を探し出しながら能動的に空間を利用するものであることが明らかとなった。したがって、若者は借楽園を非日常的な空間として享受するのではなく、より柔軟で自由に利用できる日常的な空間、あるいは日常性の延長線上にある空間として享受している。本研究は非日常性で性格づけられる観光空間だけでなく、日常性を重視した観光空間づくりの可能性を示唆している。

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景と問題の所在

観光を中心とした地域産業の振興や観光を重視したまちづくりがますます注目を集めている（佐々木 2008）。そのため、地域の観光資源と観光者の行動特性との関係を明らかにしようとする研究も増加している（橋本 1997；小島 2008）。この要因は、観光の活性化を図るために、リピータの割合を高めることや観光者の当該地での滞在時間を長くすることが必要だと考えられるようになったからである（田中・和田 2005）。例えば、羽生ほか（2002）は白川村萩町地区を事例に、立ち寄り観光者が集落内でどのような行動をしている

のか、どのような集落景観が観光対象となっているのかを検討するため、観光者の流動調査とアンケート調査を行った。調査は地区内の52箇所に調査員を配置し、通過人数をカウントすることで観光者流動を把握するものであった。そして、萩町地区を訪れる観光者について、観光者の起点と観光対象相互の位置関係から定番的な周遊ルートが現出していることと、文化財保存の視点から高い評価を受けている風景ははじめてその地を訪れる観光者にも訴求し観光対象化されることの2つが明らかにされた。また、観光者の周遊ルートのシークエンスから結果として印象を強める風景があるものの、これは文化財としての評価と必ずしもリンクするものではないことも指摘された。その結果、周遊型観光者を受け入れるために、文化財保存とは別の視点で地域を再評価する必要性が示唆された。

他方、田中・和田（2005）は岐阜県高山市を事例に、観光行動に関するアンケート調査を観光者に対して実施した。結果として、歴史都市として観光者を多数集める高山市では、観光者が比較的近くの地域から来訪

\* 首都大学東京大学院都市環境科学研究科 地理環境科学専攻 博士後期課程（日本学術振興会 特別研究員DC）

\*\* 首都大学東京大学院都市環境科学研究科 地理環境科学専攻 博士後期課程

\*\*\* 茨城大学人文学部 社会科学科 専任講師  
〒315-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1  
e-mail n-obara@mx.ibaraki.ac.jp

\*\*\*\* 首都大学東京大学院都市環境科学研究科 教授  
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1  
e-mail kikuchan@tmu.ac.jp

し、リピータが3分の2を占めることが明らかにされた。さらに、滞在時間が長い被験者の旅程を観光ルートとして回遊型、混合型および往復型に類型化し、往復型で一泊二日以上の高時間滞在する観光者が全体の半数を超えていたことも明らかとなった。田中・和田(2005)は、これらの結果を踏まえて、高山市を訪れる観光者は目的地を高山に定め、多くの時間を使って観光していると考察した。さらに、都市域のある地域に広がる歴史的町並みに博物館的な資料性を見出した藤原(2006)は、観光を視野に入れたまちづくり計画を「エリアミュージアム」と定義した。そして、その先進地として滋賀県長浜市を事例に、観光者の行動追跡調査を行い、エリアミュージアムの空間実態と空間的魅力との相互関連を分析した。分析の結果、修景事業が行われたほぼ全ての地点で、施設のディスプレイを見る、施設に入店する、施設の写真を撮るなどの観光行動が確認された。そして、エリアミュージアムにおける「展示」という博物館特有の情報発信の行為が街路空間の演出という手法と結びつき、町並みの景観を形成し、そこを訪れる観光者の行動にも影響を与えたことを明らかにした。

以上に概観したように、観光行動に関する従来の研究は、滞留することを観光発展として、立ち寄ることを全て好意的な評価とみなして分析している。観光地の活性化を考えていくためには、観光者のニーズや行動特性を反映したきめ細かな計画が求められる(野村・岸 2006)。しかし、いずれの研究においても、観光者の属性の違いを軽視しており、非日常性の観光空間における観光者の持つ属性の違いから生じるニーズや行動特性について課題が残されている。そこで本研究は、観光者が日常性から非日常性の空間に入り込んだことを強く認識できる博物館的な歴史公園である偕楽園を事例とし、特に若者(20歳代)の観光行動に着目して、観光空間の性格を把握することとした。

観光者の行動特性を把握するための従来の調査は、これまでに大きく分けて追跡型と呼ばれる調査手法と定点型と呼ばれる調査手法の2つが用いられてきた。追跡型調査はある特定の場所を通過した人物を1人ずつ追跡し、その人の目的地や回遊ルートを詳しく調査する調査手法である(橋本 1993)。一方、定点型調査はある特定の場所を一定の時間にどのくらいの人数が通過したかについて、その人数を定量的に把握するものである(石内ほか 1997)。これまでの研究では、観光者の側からみた地域の特性を明らかにするためには

追跡型調査が多く採用され、地点ごとの流動量からそれぞれの観光地の交通流を明らかにするためには定点型調査が多く採用されてきた。

しかし、これらの従来の調査手法にも問題点が存在する。追跡型の調査を長時間にわたって行う際には、近年問われることの多い研究倫理の見解から、被験者に対して事前に調査の説明を行い、許可を得ることを必要とする(宮田ほか 2003)。また、仮に協力が得られた場合でも、特に観光行動においては、被験者に対して精神的な負担を与え、行動に大きな影響を与えてしまうことが予想される。そのため、追跡型調査は一般性に乏しく、実際の観光行動とは異なる結果を得てしまう可能性が大きいという欠点を持っている。一方、近年では、観光者の行動特性を把握するために、追跡型調査と定点型調査の特性を兼ね備えたGPS受信機<sup>1)</sup>を利用した調査手法が開発されている(例えば、藤田ほか 2003; 古谷 2006; 山本ほか 2006など)。野村・岸本(2006)は寺社巡礼の観光地としての鎌倉市を事例に、複雑な観光者の行動特性をGPSによって調査した。その結果、観光拠点である名所旧跡やその周辺地域では観光者が低速で滞留していることに加え、その一方で観光拠点と拠点の間の移動経路上や社寺へつづく坂道や山道においては早い速度で移動していることが明らかにされた。このようなGPSを用いた調査は今後も増加する傾向にあると思われるが、同時に課題も残されている。GPSを用いた調査は主に移動ルートのみを把握するものである。そのため、被験者が実際にそこで何をしていたのかを具体的に捉えることは、GPSを用いた調査のみでは困難であり、GPS調査と共に参与観察や現地調査を必要とする。

以上を踏まえ、本研究では、新しい研究方法の開発という意味合いも含めて、家庭用デジタルビデオカメラを用いた調査を行った。家庭用ビデオカメラはその価格も以前に比べて廉価となり、今日では誰でも気軽に利用できる家庭用電化製品であり情報機器でもある。また、近年発売される携帯電話にも、動画撮影可能な小型カメラが標準装備されており、若者にとってはデジタルカメラやデジタルビデオカメラに対する抵抗感が少なく、普通に操作するコミュニケーション媒体の1つになっている。さらに、ビデオカメラは被験者の行動を連続で撮影し詳細に把握でき、被験者の観察時の視線や会話が記録できる。そのため、観光行動の調査においてビデオカメラの可能性は大きく、有効な調査機器として大いに期待できるものとなっている。

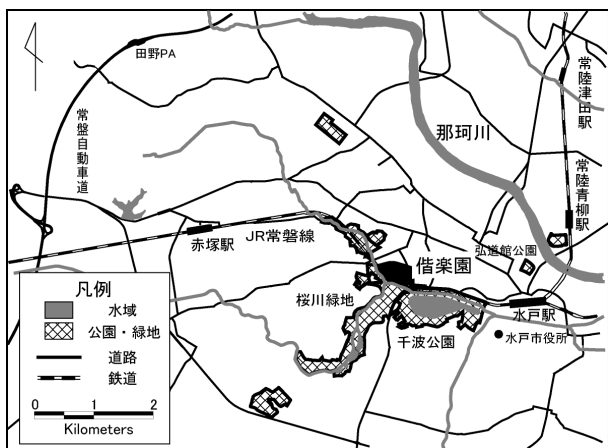


図1 偕楽園の位置



写真1 観梅の時期における偕楽園内の景観

(2008年3月撮影)

早春の梅の季節には、園内が老若男女の人々で賑わう。

## 1.2 調査地概要

偕楽園は水戸市の中心部に位置する広さ約 13ha の公園で、1842 (天保 13) 年に水戸藩第九代藩主徳川斉昭によって造園された (図 1)。偕楽園は金沢市の兼六園、岡山の後楽園とならび、「日本三公園」の 1 つに数えられている。徳川斉昭は「領内の民と偕 (とも) に楽しむ」場にししたいと願い、偕楽園を造園した。園内への入口として東西南北に門が設けられ、園内には約 100 品種、3,000 本の梅が植えられている。早春には多くの観梅客が訪れる。観光者の多くは偕楽園の最も有名な観光資源である観梅を目的に訪れるため、偕楽園は早春に観光のピークを迎える (写真 1)。しかし、近年では春の桜や初夏のクリスマスツツジ、そして秋の萩を観るために偕楽園を訪れる観光者も増えている。そのため、毎年 2 月下旬から 3 月下旬にかけて「水戸の梅まつり」、5 月には「つつじまつり」そして 9 月には



写真2 水戸を紹介するパンフレット

水戸を紹介する多くのパンフレットの中には、偕楽園の写真が配置されている。

「水戸の萩まつり」が開催されている。また、2001 (平成 13) 年には、環境省選定の「かおり風景百選」に選ばれ、特別な場所や非日常的な空間としての偕楽園の性格が決定づけられた。

偕楽園は江戸期の開園以来、その「領内の民と偕 (とも) に楽しむ」という斉昭の意思を尊重し、現在でも無料で開放されている。しかし、斉昭によって休憩所として建設された木造 2 層 3 階建ての好文亭のみは有料となっている。1999 年 7 月には隣接する千波公園などとあわせて名称を偕楽園公園として統一し、面積を合計 300ha<sup>2)</sup> とした。現在では、偕楽園公園は茨城県の県営公園となっている。

## II. 雑誌記事の記載事項からみた偕楽園

### 2.1 調査方法

偕楽園は水戸市にとって重要な観光資源の 1 つである。それは水戸の紹介をする多くのパンフレットからも読み取ることができる (写真 2)。このような観光資源である偕楽園には、現在、どのようなイメージが付与されているかを明らかにするため、茨城県を対象とする観光ガイドブックと、茨城県内で発行・配布されているフリーペーパー、およびタウン誌における記載事項を分析した。使用した観光ガイドブックは 3 誌で、それらは一般書店で販売されている『るるぶ情報版』 (以下『るるぶ』) の国内シリーズと、『まっふるマガジン』 (以下『まっふる』) の国内版、およびロコミに基づいて作成されたガイドブック『サーベイ』の茨城版 (以下『サーベイ』) である。『るるぶ』と『まっふる』

表1 観光ガイドブックにおける偕楽園の特集とその見出し記事

『るるぶ』	
2004年	花に出会う街 東風に吹かれて水戸歩き 天下の名園 梅咲き誇る
2005年	見どころ、遊び場も充実の特選花スポット12 3000本の風雅な梅トンネルが続く水戸・偕楽園
2006年	春まぢか、ふくいくとした香り漂う 梅の名所・偕楽園を訪れる
2007年	その名も、好文さんと行く水戸が誇る名園偕楽園を歩く
2008年	庶民に愛される日本三名園の一つ 偕楽園 梅竹フォトグラフ
『まっぷる』	
2004年	水戸徳川家のお膝元 殿様気分でゆるりと漫遊 梅香る偕楽園と徳川史跡めぐり
2005年	ポイントおさえて快適さんぽ 偕楽園をめぐる おすすめ観梅みどころBEST3
2006年	名君が造園した偕楽園で 優美に香る梅林に酔う
2007年	芳香漂う早春の水戸 偕楽園梅さんぽ
2008年	観梅と名所めぐりを楽しむ偕楽園さんぽ

各年次発行の『るるぶ情報版』、『まっぷるマガジン』より作成  
発行された年はそれぞれ前年

る』は2003年から2007年までに発行された5冊をそれぞれに対象とした。フリーペーパーとタウン誌は2008年1月号（前年12月発行）から8月号までの県北、県央、県南、県西、鹿行の各地方で民間企業によって発行されたものを対象とした。しかし、これらのフリーペーパーとタウン誌の記事の題材は地元に着したものが多く、県央地域にある偕楽園についての記述はほとんどなかった。偕楽園についての記載があったものは、県央地域発行のタウン誌『月刊みと』2、3、4月号、フリーペーパー『月刊ぷらざ 茨城・県央版』3月号、と県西地域発行のタウン誌『だてっこ』3月号の3誌5冊にすぎなかった。

## 2.2 観光ガイドブックにおける偕楽園

観光ガイドブックに関しては、3誌11冊すべてに偕楽園の記述がみられた。特に『るるぶ』と『まっぷる』の2誌では、偕楽園に割かれた紙面の面積が『サーベイ』と比較して大きく、その観光資源の重要性が反映されている。例えば、『るるぶ』では偕楽園についての記事が2ページ以上にわたって特集されていた。特に5冊中の4冊において、見出し記事のタイトルに「花」や「梅」の文字が含まれていた（表1）。また含まれていない残りの1冊においても、偕楽園について掲載されていたページにおいて最も大きな写真は、園内の梅林の写真であった。したがって、『るるぶ』においては、偕楽園イコール梅というイメージを前面に押し出す形で、1つの観光空間が紹介されていたといえる。

一方、『まっぷる』では、偕楽園が1ページを使って特集されているものが2冊、2ページに渡って特集されているものが3冊と、『るるぶ』と比較すると、偕楽園の占める割合が減少していた。加えて、全ての記事タイトルに「梅」が含まれてはいたものの、記事に掲載されている最大の写真が、梅林ではないものが1冊あった<sup>3)</sup>（表1）。しかし、総じてみると、やはり偕楽園の記事においては、梅林の写真が最も大きく掲載されており、観光空間の主要な資源を梅にしていることは先に説明した観光ガイドブックと変わらない。

また、『サーベイ』では、偕楽園と園内にある好文亭が分けられて解説されていた。偕楽園については「四季折々にわたって楽しめる日本三大名園のひとつ」とあった。『サーベイ』における偕楽園の説明は、主に「評価の声」としてクチコミ形式で6件掲載されていた。しかし、それらのクチコミの内容は全て料金や施設内の案内に関するものであった。一方、偕楽園の「施設内容」と「施設より<sup>4)</sup>」という2つの項目についてはクチコミではなく、「梅まつりで賑わう日本三大名園」という説明と共に、梅まつりの日程が記載されていた。加えて、掲載されている偕楽園の写真は梅林ではなかった。したがって、『るるぶ』『まっぷる』といった外向きの観光ガイドブックと『サーベイ』といった内向きの観光ガイドブックの差異が明確に反映されていた。

いずれにせよ、観光ガイドブックに掲載され、読者に提供されている偕楽園の情報は、多かれ少なかれ梅を中心としたものであった。そして、その梅の情報は

花、木、林、あるいは香りに派生する傾向にあった。

表2 行動調査の被験者属性

	性別	調査日	調査時間	滞在時間	天候	同行者
被験者a1	F	2007.10.24(水)	13:46~14:32	46	晴れ	1名(F)
被験者a2	M	2007.10.25(木)	11:42~12:23	41	晴れ	1名(F)
被験者a3	F	2007.10.25(木)	17:11~17:38	27	晴れ	2名(F,F)
被験者a4	M	2007.10.25(木)	11:49~12:29	30	晴れ	1名(F)
被験者a5	M	2007.10.25(木)	17:15~17:26	11	晴れ	なし
被験者a6	M	2007.10.25(木)	17:11~17:25	14	晴れ	なし
被験者s1	F	2008.3.23(日)	13:27~14:37	70	晴れ	なし
被験者s2	F	2008.3.23(日)	13:27~13:58	31	晴れ	なし
被験者s3	M	2008.3.23(日)	13:25~13:52	27	晴れ	なし
被験者s4	M	2008.3.23(日)	13:21~14:08	47	晴れ	なし
被験者s5	F	2008.3.23(日)	13:27~14:22	55	晴れ	なし
被験者s6	M	2008.3.24(月)	11:14~12:20	66	雨	2名(F,M)

滞在時間の単位は分

## 2.3 フリーペーパー・タウン誌における偕楽園

次にフリーペーパーとタウン誌について検討した。水戸市内で発行され、県央地域で販売されているタウン誌『月刊みと』では、2008年2月号、3月号、4月号に偕楽園の情報が記載されていた。2月号では11ページに渡る特集「水戸の梅まつりと郷土の味めぐり」があり、冒頭に「今年も梅まつりの季節がやってきました。上品な香りが漂う偕楽園にみんなで出かけてみませんか。」とあった。つまり、梅まつりの紹介として偕楽園の情報が記載されていた。また、同誌の3月号と4月号ではそれぞれ、「お花見に出かけよう!」、「GW(ゴールデンウィーク)はココへ行こう」という特集で偕楽園が取り上げられていた。それらのなかでは、3月号では梅を、4月号では躑躅(つつじ)を觀賞できる場として偕楽園が記載されていた。両者とも偕楽園は数多くある県内の花見スポットの1つとしての扱いであり、園内にある梅と躑躅の簡潔な説明も誌面にあった。

また、フリーペーパー『月刊ぷらざ 茨城・県央版』3月号では、偕楽園の梅まつり開催中に催される夜梅祭の告知が掲載されていた。『だてっこ』3月号では「梅・桃まつり情報」の1つとして偕楽園と弘道館で開催される「水戸の梅まつり」情報が掲載されていた。総じてフリーペーパーとタウン誌における偕楽園の情報は梅まつりを中心としたものであった。フリーペーパーやタウン誌は躑躅の花見ができる場所という情報も多く掲載されていたが、偕楽園を強くイメージさせる花は梅であるとうことも強く打ち出されていた。

全体的には、観光ガイドブックにも、あるいはフリーペーパーやタウン誌にも、梅を強くイメージさせる偕楽園の記載がみられた。特に、観光ガイドブックにおける梅の記載は著しく、遠方から訪問する観光者にとって、来訪の動機となる最も重要な資源は梅であることが観光ガイドブックに強く反映されている。言い換えれば、偕楽園の梅は非日常性を創出し、それを観光者に経験させる、もしくは期待させる最も有力なイメージであり、資源であるといえる<sup>5)</sup>。

## Ⅲ. 若者のレクリエーションからみた偕楽園

### 3.1 調査方法と分析手段

本研究は、実際の若者のレクリエーション行動を分

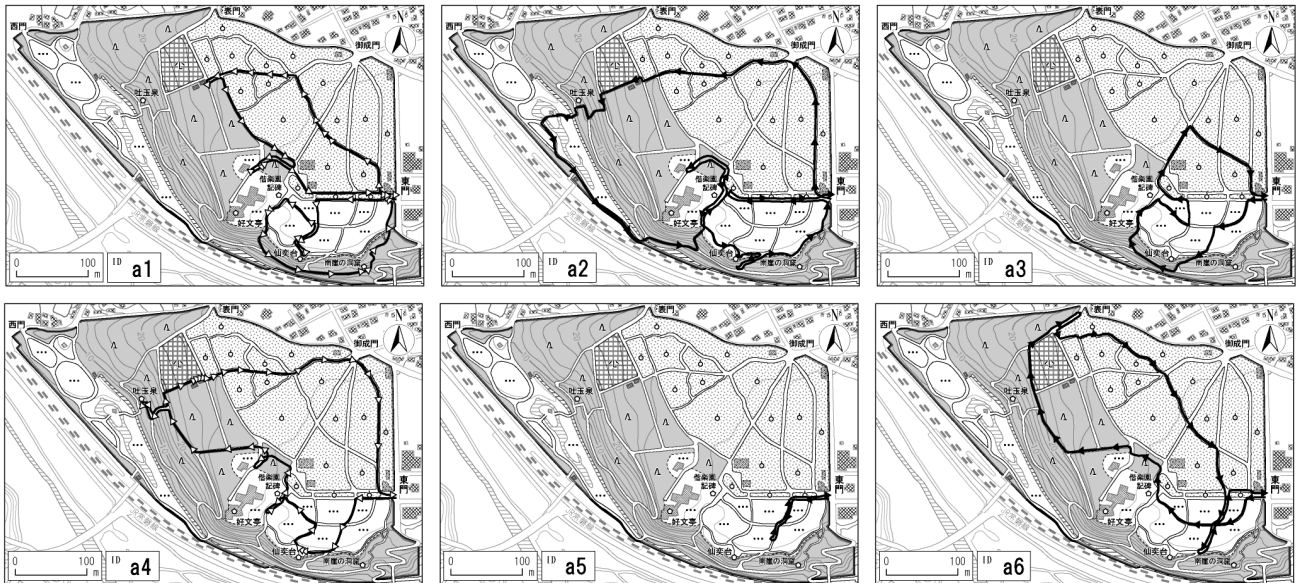
析・検討することで、偕楽園という観光空間を考察することを目的とした。観光者の行動や観光資源に対する反応(以下観光行動)は、観光空間の消費の仕方でも示されることになり、その消費のパターンは観光空間の性質を敏感に投影することになる<sup>6)</sup>。したがって、実際にそこで行われた観光行動を読み解くことは、観光空間の性質を理解するための重要な指標の1つになる。

本調査の被験者は茨城大学、および茨城大学大学院の学生から任意に募集した延べ19人<sup>7)</sup>である。事前に被験者に対して、調査の趣旨説明を行い、許可を得た上で調査が行われた。調査は、被験者にデジタルビデオカメラ(Sony HDR-SR11)を入園前に手渡し、ビデオカメラの操作方法を習得してもらった上で、東門を基点にして園内を自由に移動してもらう方法を採用した。また、被験者には園内において気になった風景や事物、あるいは事象をビデオカメラで撮影しながら移動するように指示した。偕楽園のイメージや観光資源として最も重要な要素は梅やそれに関連した植物であるため、調査は花の季節に合わせて秋(10月末)と春(3月末)の二回に別けて行った(表2)。

本研究は現地で撮影されたビデオの内容に基づいて、若者のレクリエーション行動を3つの指標から分析した。それらは被験者の移動ルート、視線、会話内容の3点である。レクリエーション行動における移動ルートは観光空間の考察において重要な見解をもたらすものである。観光者がどのように移動し、時間をどのように消費しているかは、観光資源の分布状況とともに、観光者の観光資源に対する認識や認知の状況と深く関わっている(橋本 1996)。したがって、若者のレクリエーション行動における移動ルートの考察は、若者からみた偕楽園を示す重要な指標となる。

当然のことながら、人は五感を用いて空間を認知す

秋調査: 2007.10.24~10.25



春調査: 2008.03.23~03.24

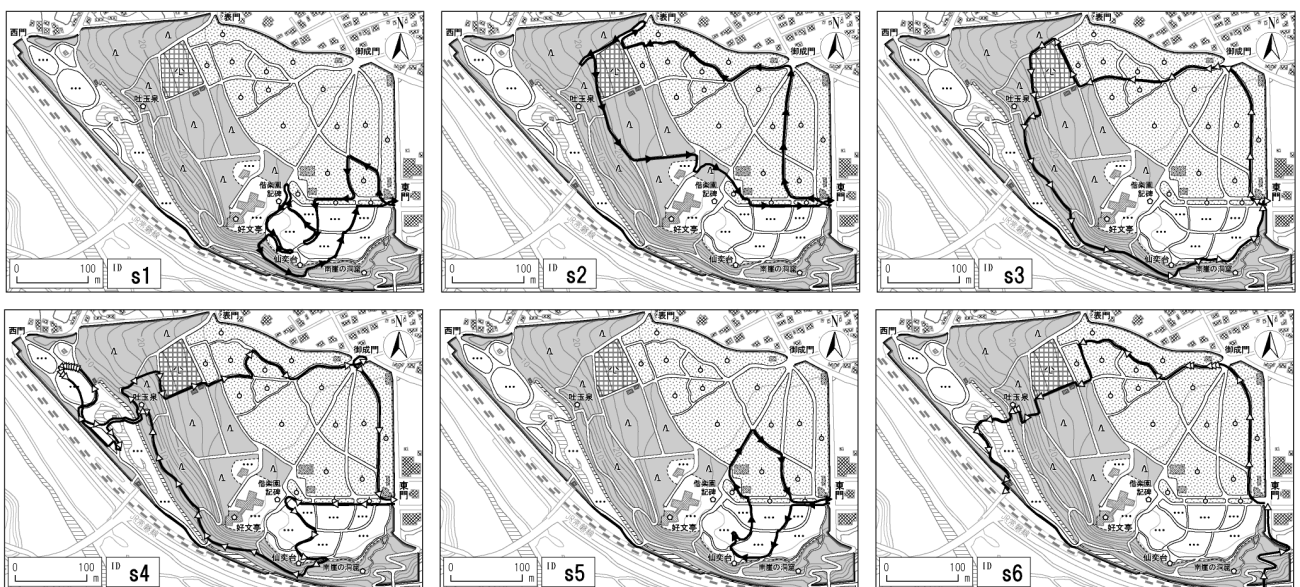


図2 全被験者の移動ルート

(被験者に対する行動調査により作成)

る。なかでも、視覚は最も認識しやすく、強く空間を印象づけるものとなる（内海ほか 2000；溝尾 2008）。したがって、観光者の風景や事物、あるいは事象に対する視線は、観光者の観光空間に対する興味や印象を直接的、間接的に示すものとして捉えることができる。つまり、若者のレクリエーション行動における視線も、若者からみた偕楽園を示す重要な指標になる。

一方、観光者が同行者を伴う場合、移動しながら会話が行われ、コミュニケーションが交わされる。この

コミュニケーションは観光空間における観光者の経験としても重要な指標となり、観光空間に対する直接的、間接的な印象を示すものとなっている（並木 1999）。したがって、偕楽園内のレクリエーション行動における若者の会話も有意な資料として分析する。

### 3.2 移動ルートの特徴

#### (1) 秋における若者の移動ルート

秋の調査における被験者の移動ルートについて検討

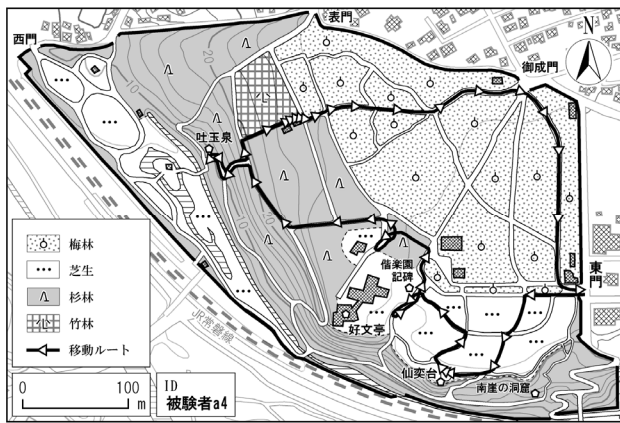


図3 被験者 a4 (秋) の移動ルート  
(被験者に対する行動調査により作成)

すると、多くの被験者が東門を出て最初に、向かって左手に広がる見晴し広場に移動していた(図2)。そして、東門に戻るルートとして、梅林内を移動する被験者が多かった。また、多くの被験者は万遍なく園内を移動し、園内のそれぞれの場所において均等に時間を使っていた(図2)。なお、被験者の平均滞在時間は偕楽園全体で28.2分であった。ここで、より詳細に移動ルートを検討するため、秋の調査において代表的な移動ルートをとった被験者 a4 の移動ルートについて詳細な考察を加えることにした(図3)。

被験者 a4 は園内に入りしばらく直進し、左にルートを取って芝生の広がる見晴し広場へと移動した。したがって、被験者 a4 は向かって右手の梅林よりも、左手の見晴し広場により魅力を感じたといえる。その後、被験者 a4 は見晴し広場を横断し、仙奕台まで移動した。見晴し広場には視界を遮る樹木が少ない。また、偕楽園の南から南東方向には仙波湖や偕楽園公園、および水戸市街地が広がっており、晴れた日には、見晴し広場から仙波湖や水戸市街地を望むことができる。そのため、見晴し広場は人々にとって解放感を与える空間となっている<sup>5)</sup>。被験者 a4 も解放感を味わうため、見晴し広場や仙奕台へと移動したことが伺える。実際、多くの被験者が仙奕台で長い時間を費やす傾向にあった。

次いで、被験者 a4 は好文亭に向けて移動し、好文亭前の料金所に到着した。しかし、被験者 a4 は好文亭には入館せずに引き返してしまった。好文亭の入館には大人1名につき150円(2008年3月現在)が必要である。調査前の指示では、好文亭の入館は任意としたが、その料金は各自払うように指示した。つまり、好文亭の入館料150円が、若者にとって経済的な制限となっ

ていることがわかる。なお、本調査では全ての被験者が好文亭に入館しなかった。150円という僅かな金額ではあるが、偕楽園における若者の移動ルート、言い換えれば若者にとっての偕楽園には大きな影響をもたらしている金額であるということがわかる。好文亭前から引き返した後、被験者 a4 は杉林や吐玉泉、および竹林へと進んだ。そして、化粧室において長い時間を費やした。被験者 a4 の移動ルートにおいて最も時間が費やされている箇所がこの化粧室でもあった。

その後、被験者 a4 は東門へと引き返し始めた。しかし、以前に進んで来た道をそのまま戻るのではなく、幹だけの状態の梅林内を通り抜ける移動ルートを選択していた。このことから、梅の花がついていない秋の季節においても、被験者 a4 の意識として、偕楽園の観光資源としての梅林が大きく存在していたことが伺える。その一方で、梅林内において立ち止まったり引き返したりする傾向はなく、常に一定の速度で移動していた。つまり、秋の偕楽園における梅林という観光資源は、その知名度により認識はされているものの、若者にとってはあまり興味のわからない消極的な存在であるといえる。他の多くの被験者も梅林内を通る移動ルートを選択していたが、共通して梅林内に多くの時間を割くことはなかった。梅林内を通過後、被験者 a4 は東門へと到着した。被験者 a4 の総移動時間は30分間であった。

先に述べたように、偕楽園の最も重要な観光資源は一般的に梅とされている。しかし、偕楽園において梅の花を見ることができるのは毎年2月下旬から3月下旬頃までである。そのため、秋の偕楽園における最も重要な観光資源は梅ではなく、見晴し広場や仙奕台からの風景と休憩施設<sup>6)</sup>であり、それらは観光資源として若者のレクリエーション行動に影響を与えていた。

## (2) 春における若者の移動ルート

次に春の調査における被験者の移動ルートについて検討した。図2によれば、多くの被験者は園内に入ってからすぐに梅林の方向へ移動したことがわかる。しかし、梅林内における移動ルートをみると、特に梅林内で立ち止まったり引き返したりすることはなく、秋と同様に万遍なく園内を移動し、それぞれの場所で均等に時間を消費する傾向があった(図2)。春の調査における被験者の平均滞在時間は、偕楽園全体で42.0分であり、観梅の季節を反映して、秋の調査よりも相対的に長くなっている。

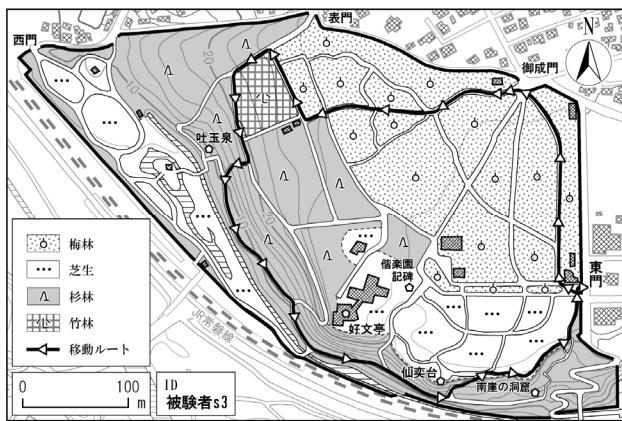


図4 被験者 s3 (春) の移動ルート  
(被験者に対する行動調査により作成)

次に、春の調査において代表的な移動ルートをとった被験者 s3 の移動ルートについて詳細に考察した(図4)。被験者 s3 は園内に入り、すぐに右側の梅林へと移動した。このことから、被験者 s3 は左手の見晴し広場よりも、観梅の季節を反映して、右手の梅林により魅力を感じたといえる。その後、被験者 s3 は梅林内を御成門の方向へ直進し、続けて梅林内から竹林の方向へ移動した。被験者 s3 の梅林内の移動ルートにおいて、比較的多くの時間が費やされている箇所は東門付近と御成門付近であった。この要因はそれぞれの門の近くに園内の情報を得るための看板や地図などが設置されているためと、門付近では他の観光者も多く滞留しており、通り抜けに多少の時間がかかっていたためであった。春の調査において、これらの門付近において、長い時間を費やす被験者は散見されたものの、総じて多くの被験者は梅林内を一定の速度で移動していた。つまり、被験者は秋と同様に、梅林内で立ち止まったり、梅林内をくまなく回遊したりはしなかった。調査日においては、比較的高齢の人々が梅の木の前で立ち止まっている姿が園内で多くみられた。しかし、本調査における被験者の移動ルートにおいて、そのような移動ルートはみられなかった。つまり、若者のレクリエーション行動から考察する限り、梅林は若者に対して興味をそそるものではないともいえる。

梅が咲き誇る梅林は風景としてはとても綺麗であり、若者の移動ルートの選択には影響を与えていた。しかし、梅林は若者を立ち止まらせ、時間を取らせゆつくりと愛でられるものでなかった。春の調査では、全ての被験者が梅林内へ訪れている。しかし、梅林のみを利用し回遊して引き返してくるという移動ルートはみられなかった。秋の調査では、見晴し広場のみを利用

して引き返して来た被験者がいたのに対し、この結果は対照的であった。つまり、若者は偕楽園において梅林のみを観ることだけで満足せず、その後も何かを期待して園内を散策し続けたといえる。梅林を出た後、被験者 s3 は竹林と杉林をぬけて、引き返すルートを選択し始め、低地へとおりた。ここまでの時間の使い方も梅林と同様に一定であり、被験者 s3 は全体的に万遍なく移動していた。被験者 s3 は低地上を移動した後、台地上へ上がり、東門に到着した。被験者 s3 の総移動時間は 27 分間であった。

春の調査時には、満開に近い梅の木が梅林内を含め、偕楽園全体に分布していた。春の調査における被験者の移動ルートを考察した結果、梅林が偕楽園における重要な観光資源であることは否定できない。しかし、若者の梅林内における時間の消費の仕方は、秋の調査のそれとほとんど変わらなかった。逆に、春の調査においては、若者が時間を集中的に消費する観光資源が秋の調査と比べて減少していた。これは、若者のレクリエーション行動をみる限り、春の偕楽園の魅力が秋の偕楽園に比べて減少してしまったことを示している。春の偕楽園が観梅という非日常的な空間だけに依存し、それ以外の魅力が観梅の陰に隠されてしまった結果、若者にとって観光空間の魅力は弱められてしまったといえる。

### 3.3 視線の特徴

#### (1) 視線の分析手法

若者の移動ルートに関して、季節によって差異がみられたが、時間の消費の仕方は大きな差が識別できなかった。そこで本節では、これらの移動ルートをとった若者が実際に園内で何を見ていたのか、つまり何に視線を向けていたのかについて分析した。分析の手法は以下の通りである。まず初めに、被験者が撮影したビデオの映像から1つの被写体に向けて5秒間以上撮影が行われているシーンをそれぞれ抽出した。次に、抽出した被写体それぞれを、偕楽園において一般的に認識されている非日常的な観光資源(非日常的被写体)と、偕楽園以外においても生活のなかで頻繁にみられる観光資源(日常的被写体)の2つに分類した。そして、それぞれの被写体をそれぞれの撮影場所以に基づいて、被験者の移動ルート上に分布図として示した。

#### (2) 秋における若者の視線

秋の調査における被験者の代表する事例として、被



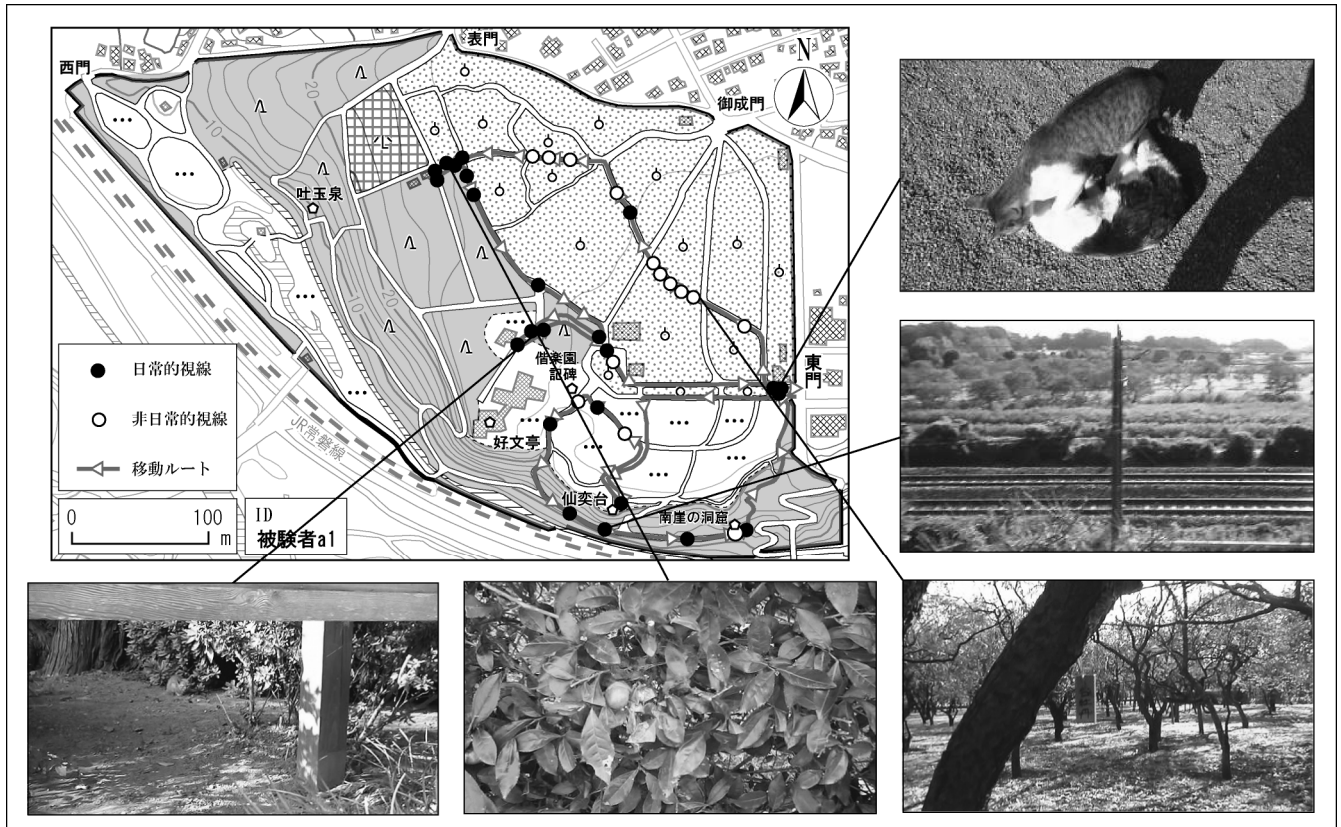


図5 被験者 a1 (秋) の撮影箇所

(被験者に対する行動調査により作成)

験者 a1 の撮影した被写体と、それらの撮影場所について考察を加えた (図 5)。被験者 a1 の撮影した非日常的被写体と日常的被写体の撮影場所には偏りがみられた。非日常的被写体の撮影場所の多くは梅林内にあり、日常的被写体の多くは杉林内や好文亭付近にみられた。

具体的には、被験者 a1 は園内に入るとすぐに、日常的被写体を多く撮影した。例えば、東門付近で被験者 a1 の撮影した被写体は、借楽園内を宿としている野良猫であった。野良猫は借楽園において特別な動物ではなく、借楽園以外においても広く街中で見ることができる。このような野良猫の撮影は好文亭付近でも集中してみられた。そして、野良猫の撮影に使用された延べ時間は借楽園内において撮影した被写体のなかで最も長いものとなった。したがって、被験者 a1 が借楽園において最も大きな興味をもった事象は野良猫の様子であったことが伺える。さらに、野良猫の撮影に加えて、道横の看板や JR 常磐線の線路などの日常的被写体の撮影が多くみられた。借楽園内において、これらの日常的被写体の撮影回数は、以下に述べる梅林内を主とする非日常的被写体の撮影回数よりも多かった。

梅林内において撮影された被写体をみると、その多くは非日常的被写体であった。ただし、被験者 a1 の撮

影した非日常的被写体のほとんどは、梅林そのものではなく、梅林に括り付けられた樹種が記載された札であった。梅の木は秋には花をつけない。つまり、被験者 a1 はそれぞれの木々に括り付けられた札によって、梅の木の種別を判別しようとしていたといえる。先に議論したように、借楽園の非日常性は梅に大きく依存している。しかし、秋の調査における被験者 a1 の視線を考察すると、その非日常性は雑誌記事に掲載されているような梅の花を視覚として堪能するものではなく、梅の木の樹種名を読んで確認することによって導かれていた。これらのことは、借楽園に存在する、もしくは存在すべきとされている非日常性 (梅) を、自分のなかでどうにかして取り込もうとする行為の表れと解釈できる。

被験者 a1 は多くの場所で、従来から指摘された梅などの非日常的被写体よりも、猫や看板といった日常的被写体に大きな興味をよせていた。秋の調査における他の被験者の視線についても、被験者 a1 のそれと同様の傾向が伺えた。したがって、若者の視線の特徴からみた秋の借楽園は、梅林に支えられた非日常的空間としての存在ではなく、より日常的な事象に基づく日常的空間として存在するものとして捉えることができる。

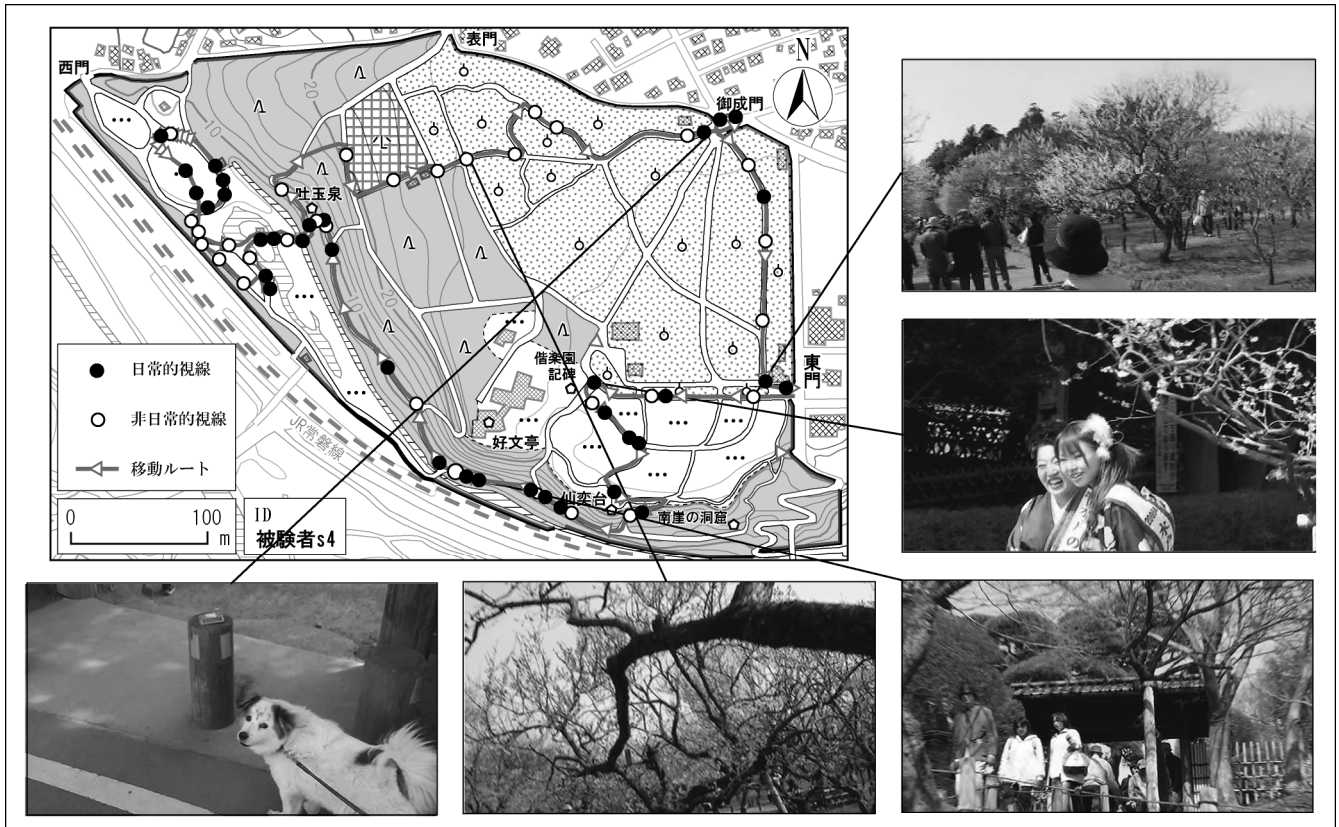


図6 被験者 s4 (春) の撮影箇所

(被験者に対する行動調査により作成)

一方、被験者 a1 の梅の木の札を読み、梅の木を判別・確認しようとする行為が少なからずみられた。つまり、秋の偕楽園は若者に対して梅の木についてのより高度な学習の機会を提供する観光空間としての役割も担っている。

### (3) 春における若者の視線

次に春の典型的な事例として、被験者 s4 の被写体と撮影場所の分布を検討した (図 6)。秋の事例 (図 5) と比較すると、被験者 s4 の視線は非日常的被写体により多く注がれていたことがわかる。被験者 s4 が偕楽園に入り、最初に被写体として撮影したのは満開に近い梅の木であった。図 6 において、被験者 s4 が撮影した非日常的被写体のほとんどは梅の木そのものであった。春になると梅林内の梅はもちろん、梅林以外に植樹された梅も満開に近い状態となる。これらの梅の木は偕楽園内で常に目に入り、観ることができる。また、梅の花は赤色や桃色といった鮮やかな色をつけ、視覚的にも認識しやすい。そのため、被験者 s4 は梅林内では集中的に、梅林以外の場所では定期的に梅の木を撮影していた。そのため、若者が撮影した非日常的被写体の出現頻度は、秋の調査のそれと比較して多かった。

一方、非日常的被写体の増加に呼応するように、日常的被写体の撮影も増加していたこともわかる。これらの日常的被写体の多くは、偕楽園内における他の観光者やキャンペーンガールなどの人々ないし人物であった。このような人々の賑いは偕楽園に特有の特徴ではなく、一般に祭りや水戸市の繁華街でもみることのできる日常的な景観でもある。これらの日常的被写体は、見晴し広場や低地への移動ルートにおいて集中してみられた。これらの場所では地面が芝生となっており、人々がレジャーシートなどを敷いて、自由に休憩しや食事をするのができ、人々の賑わいが特徴的なものとなっている。また、御成門付近でも日常的被写体の撮影場所が集中していた (図 6)。例えば、被験者 s4 は御成門付近で駐車している自動車を撮影していた。被写体となったこれらの自動車は、この日に偕楽園にやって来た他の観光者のものであった。したがって、被験者 s4 は偕楽園における梅の花の鮮やかさとともに、それらを愛でる他の観光者に対しても大きな興味を持っていたことが伺える。

被験者 s4 が撮影した梅の木などの非日常的被写体と、梅を愛でる他の観光者などの日常的被写体は両者とも、秋に実施した調査と比較すると確実に出現頻度

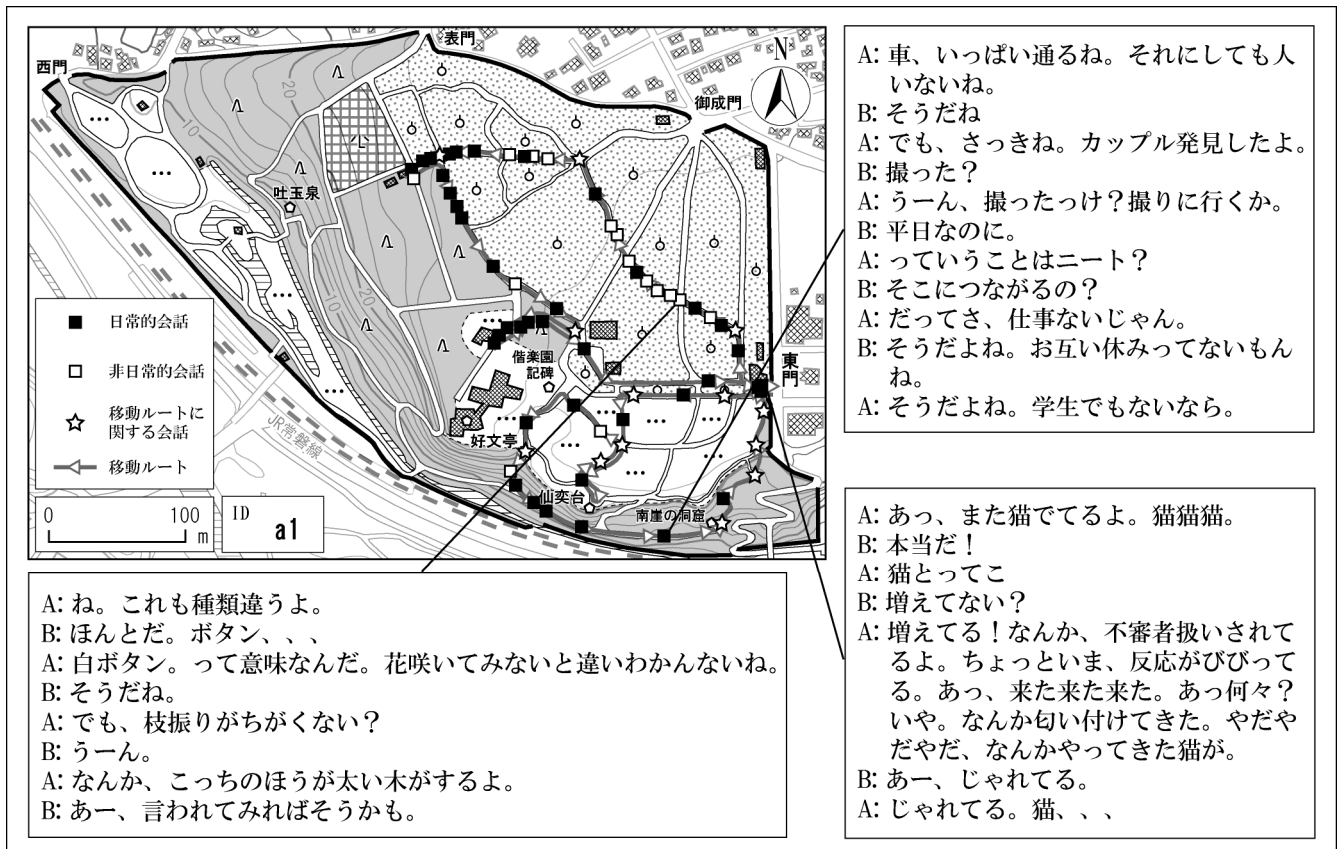


図7 被験者 a1 (秋) の会話箇所

(被験者に対する行動調査により作成)

を増やしている。これは、秋の借楽園と比較して、春の借楽園が若者にとってより魅力の多い観光空間であることを示唆している。一方、非日常的被写体と日常的被写体は、秋の調査とは異なり、借楽園内に万遍なく分布しており、それらが集中する傾向はみられなかった。また、それぞれの被写体の総数はほぼ同数であり、このような傾向は他の被験者の視線についても同様にみられた。したがって、春の借楽園は梅林に基づく非日常性の観光空間として機能しているとともに、人々の賑わいに基づく日常性の観光空間としても機能していたといえる。総じていえば、若者の視線の分析を考察すると、春の借楽園は非日常性と日常性が共存した観光空間として捉えられるが、それらの観光空間の関連性はあまり深くなかった。

### 3.4 会話の特徴

#### (1) 会話の分析手段

最後に、散策しながら移動する若者の会話内容を考察することで、借楽園の観光空間としての意味づけを検討する。分析手法は以下の通りである。まずビデオに録音された被験者と同行者の会話内容を記録した。

会話はお互いの会話のやり取りが開始されてから5秒間お互いの会話がなされない状態までを1つの会話とした。ここでの分析では、記録された会話内容を大きく3つに分類した。それらは非日常的会話と日常的会話、および移動ルートに関する会話の3つである。非日常的会話は借楽園に特定される資源についての会話である。日常的会話は借楽園でなくても日常生活のなかで普通に交わされる会話である。移動ルートに関する会話は被験者と同行者の間で交わされる今後の移動ルートを検討する会話である。以上の3つに分類した会話について、それぞれの会話が交わされた場所を分布図として、被験者の移動ルート上に示した。

#### (2) 秋における若者の会話

秋に行った調査を代表的な事例として、ここでは被験者 a1 の会話の分布を図7に示した。最初に、移動ルートについての会話の分布をみると、その多くが園路の交差路でみられた。交差路では被験者らが次に進む移動ルートを選択しなければならない。そのため、被験者 a1 は交差路に入ってからすぐに移動ルートを同行者と相談していたといえる。

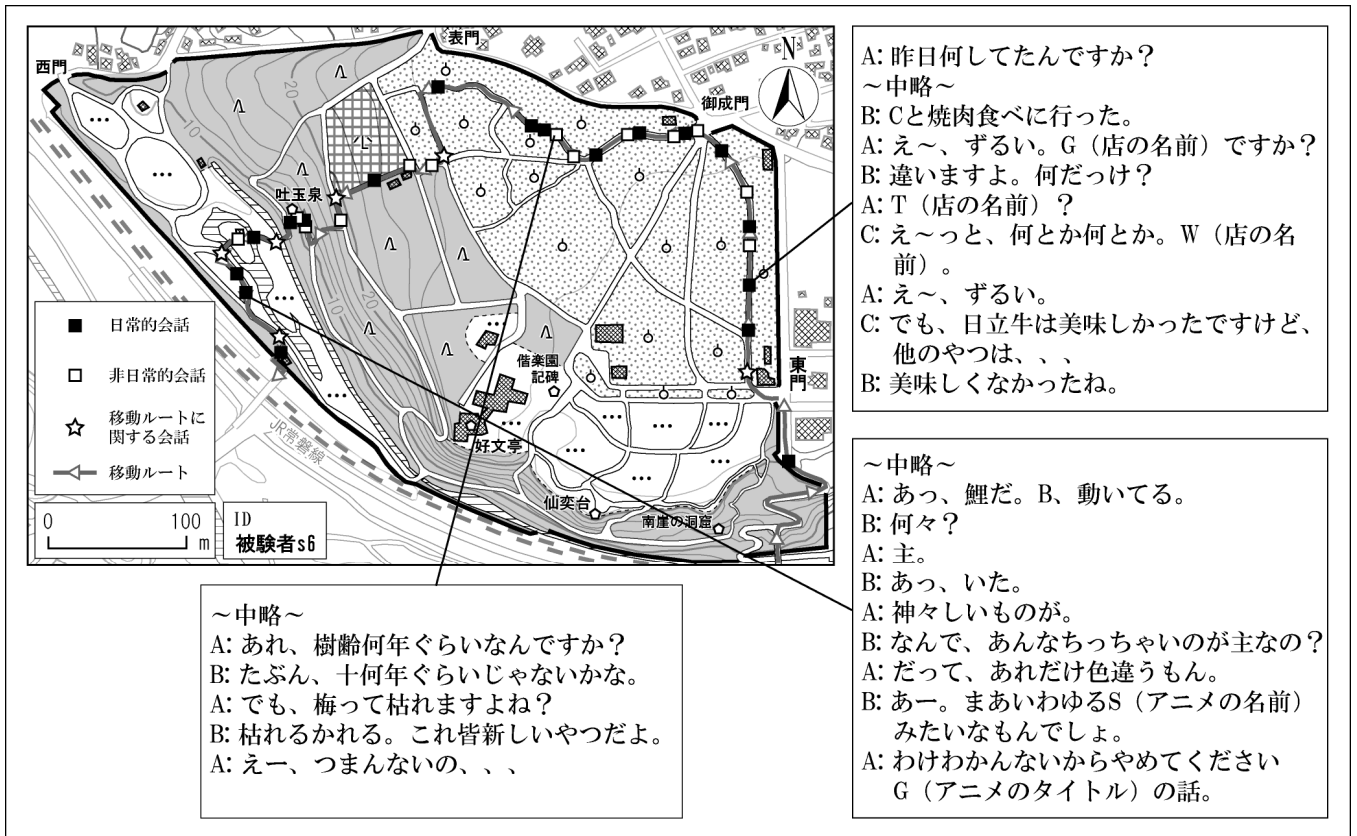


図8 被験者 s6 (春) の会話箇所

(被験者に対する行動調査により作成)

次に日常的会話の分布パターンについて考察した。図7によれば、日常的会話は移動ルート上において一定の間隔で分布していることがわかる。被験者 a1 の日常的会話の内容は、主に普段の生活に関する会話や借楽園における他の観光者についての会話であった。そして、これらの日常的会話はその分布の傾向から定期的に行われていたこともわかる。つまり、被験者 a1 は借楽園において、一定の間隔で日常的会話をしながら移動していたといえる。このような傾向は一般的に街中や公園などでみられる散策と同様のものと捉えることができる。その一方で、日常的会話が集中している場所がいくつか目立っている。図7において日常的会話が集中している場所は、視線の分析でも興味を集中した野良猫が居座る場所であった。これらの場所では野良猫についての会話が頻繁に交わされていた。

他方、非日常的会話は特に梅林内に多く集中していた(図7)。それらの会話の内容は主に梅の木の種類についてのものであった。しかし、先述したように、秋の調査時には梅の花はついていなかった。梅が咲いていない秋の梅林は木が幹だけの状態となるため、花の咲いた時期と比較すると風景のコントラストが乏しい。

視線の分析においても言及したように、被験者 a1 の視線は梅の木自体にはなく、梅の木に括り付けられた木の種類を示す札に向けられていた。つまり、被験者 a1 は梅林内における同行者とのコミュニケーションを、梅の木に括り付けられた札についての会話を通して行っていた。これは、被験者 a1 が自ら積極的に、花の咲いていない梅の木に対して、花の色合いの判断とは異なった情報を得ようと同行者と共に模索している姿でもある。このような模索とコミュニケーションは、動物園における動物展示の観覧手法などでも指摘されており、視覚からより深い理解を得ることを可能にしている。

秋の借楽園における被験者 a1 の会話について分析した結果、非日常的会話が特に梅林において出現することが確認された。このような傾向は、秋の調査におけるその他の被験者にも同様であった。しかし、被験者 a1 の会話におけるそれぞれの頻度をみると、日常的会話が非日常的会話よりも多かった。このことは、秋の借楽園が若者にとって特別な場所や空間としては認識されておらず、より日常性の高い場所や空間として機能していることを示唆している。

### (3) 春における若者の会話

春における若者の会話については、被験者 s6 の事例から考察した (図 8)。最初に、移動ルートについての会話について考察すると、移動ルートについての会話は秋の調査事例と同様に、交差路で主に発生していた。したがって、秋の調査事例と同様に、被験者 s6 は交差路に入るとすぐに移動ルートを同行者と相談する傾向をあることが読み取れる。

日常的会話も、秋の調査事例と同様に、一定の間隔で定期的に行われていた (図 8)。被験者 s6 の日常的会話の内容は、主に生活に関するものや借楽園における日常的なものについての会話がほとんどであった。図 8 によれば、それらの日常的会話は梅林内でも頻繁に発現しており、梅林以外の場所と比較しても出現の頻度に大きな差異はあまりみられなかった。つまり、被験者 s6 は借楽園内における周辺環境の変化に依存することなく、一定の間隔で日常的会話を交わしながら散策していたことが伺える。そのため、被験者 s6 の交わした日常的会話が集中する場所はほとんどみられなかった。

被験者 s6 が交した非日常的会話は梅林内に特に多く分布していなかった (図 8)。また、それらの非日常的会話の多くは場所の資源と無関係に、漠然とした借楽園の歴史、あるいは杉や竹などについてのものであり、ローカルな資源としての梅に関連する非日常的会話は比較的少なかった。これは秋の調査事例と対照的な結果である。秋の借楽園のほうが、梅に依存した非日常的会話の出現頻度が高かった。若者の会話の分析によれば、若者は借楽園の重要な観光資源の梅に関する知識を春よりも秋に得ようとし、彼らの梅に関する興味も秋にたかく春に低いものとなる。つまり、春には借楽園内に梅の花が咲き誇り、園内のコントラストも美しく、美しい風景がみられるが、若者にとって春の借楽園は美しい風景と感じる以上のものはなかったといえる。実際、春の調査事例における被験者の視線の分析でも、若者の興味は梅の木よりも、それらの木を観る他の観光者や人々に向けられていた。春の調査における被験者 s6 の会話について考察した結果、日常的会話と非日常的会話の分布とその出現数には大きな差異がみられなかった。特に、梅に基づいた非日常的会話が秋の事例のそれよりも少なかったことは特徴的な結果でもあった。それは、春の借楽園が日常的な人間観察の場として機能していたことと無関係でない。

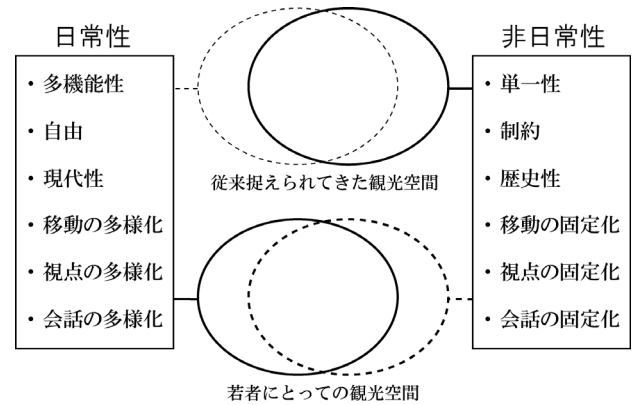


図9 若者にとっての観光空間における日常性と非日常性の関わり。理念的モデル

## IV. むすび

従来からとらえられてきた観光空間は、非日常的な要素や資源によって構成され、特別な空間あるいは「ハレ」の空間として性格づけられてきた。しかし、借楽園における若者のレクリエーション行動による観光空間に関しては、特別な空間や「ハレ」の空間としての非日常性は希薄となり、日常的な要素や資源によって構成される日常的な空間あるいは「ケ」の空間として性格が強くなっている。ここで議論すべきことは、観光空間の非日常性と日常性だけでなく、それらの性格の相互関連性や補完性である。このような議論は観光空間の存在形態を明らかにし、そのポテンシャルを活かした地域計画に有意な成果をもたらすものとなる。

借楽園におけるレクリエーション行動の調査・分析に基づいて、観光空間の性格を図9にまとめた。これによれば、借楽園という観光空間は非日常性と日常性の性格を持ち合わせていたが、梅やそれに関連した歴史などの単一の資源に強く依存することで観光者の移動や視点、あるいは会話が固定化し、日常とは異なる特別な空間がつくられてきた。このような非日常的な要素は観光者の行動や価値観を制約し、日常的な資源や要素を見えないものになっている。このような制約は観光空間の機能を単一化し、ステレオタイプの価値観やイメージを広める要因ともなった。

他方、若者のレクリエーション行動は所与の資源に依存するだけでなく、興味ある資源を探し出すものとなっていた。そのため、レクリエーション行動は制約を受けることなく柔軟で自由なものとなる。当然のことながら、そこでの移動ルートや視点、あるいは会話は多様化し、若者のレクリエーション行動に基づく観光空間は現代的で多様な機能をもつようになる。個々

人がそれぞれの価値観に基づいて多様な資源を柔軟に利用することは、特別な資源や「ハレ」の資源を意識したものではなく、日常的な資源や要素を意識したものとなっている。その意味で、若者のレクリエーション行動に基づく観光空間は日常性を強く意識したものとなっているといえる。

偕楽園もそうであるように、1つの観光空間は非日常と日常の二面性をもっているが、どちらかの性格が強くなると、もう1つの性格は打ち消されてしまう。多くの観光空間は日常性を打ち消し、非日常性を強くしている。しかし、観光空間に関する人々のニーズが多様化するにつれて、観光空間の一面的な性格をステレオタイプ的に強調することは無意味なものとなっている。偕楽園における若者のレクリエーション行動からも明らかのように、日常的な観光空間の必要性が高まっており、日常性と非日常性を両立させる観光空間づくりが必要になってきている。そのためには、観光空間の非日常性と日常性を世代により使い分ける方策や、非日常性と日常性を補完関係で結びつける方策などを考えていかなければならない。

## 注

- 1) GPS受信機(以下GPS)は屋外において、その位置を衛星から取得・蓄積することができる装置である。2000年にSA(Selective Availability)が除去されたことを契機にして、市販化が進んだ。年々その受信精度は向上している。
- 2) 2008年現在、偕楽園公園は市街地隣接公園として、ニューヨーク市のセントラルパークに次いで世界第2位の広さとなっている。
- 3) 最大の写真は園内の好文亭から撮影された写真であった。
- 4) 「施設より」の項目における記事は、施設側から提供されるもので、施設の紹介やアピールポイントについて記載されている。
- 5) 一方、その梅に付随する形ではあるが、好文亭や竹林、吐玉泉なども観光ガイドブックでは取り上げられていた。これらも偕楽園における資源として非日常性の創出に役立っている。
- 6) 例えば、海岸を例にとってみると、同じ条件の砂浜であっても、東洋においては海に入って遊ぶ人々が多数見られるが、西洋においては浜辺でくつろぐ人々が多数見られるという空間的な性質の違いがみられる。
- 7) 被験者の年齢は21歳から25歳である。偕楽園に来訪したことはほとんどなく、一般的な若者の観光者と同様の

性格を持つ。

- 5) 見晴し広場の芝生の上に寝転び、くつろぐ来訪者は少ない。
- 6) 一般的に、休憩施設は観光資源を直接的に、もしくは間接的に補助する観光施設といわれている(山村2002)。しかし、本研究では、休憩施設における時間の消費量が多いことから、便宜的に休憩施設も観光資源として称して扱う。

## 参考文献

- 石内鉄平・桑原祐史・小柳武和 2007. 偕楽園公園の利用実態および四季の変化に着目した公園管理に対する新たな提案. 環境情報科学論文集 21: 153-158.
- 内海志泉・浅川昭一郎・愛甲哲也 2000. 北海道美瑛町の農村地域におけるシークエンス景観の評価. ランドスケープ研究 63: 783-788.
- 小島大輔 2008. 熊本市における観光行動の空間的特性—主要施設来訪者の行動分析から. 地理科学 63: 49-65.
- 佐々木一成 2008. 「観光振興と魅力あるまちづくり—地域ツーリズムの展望」. 東京: 学芸出版社.
- 田中智・和田章仁 2005. 観光者の回遊経路に関する考察—飛騨高山を事例として. 福井工業大学研究紀要 35: 155-162.
- 並木美砂子 1999. 親子コミュニケーションの分析—動物園における幼児とその家族の会話分析. 日本保育学会大会研究論文集 52: 538-539.
- 野村幸子・岸本達也 2006. GPS・GISを用いた鎌倉市における観光者の歩行行動調査とアクティビティの分析. 総合論文誌 4: 72-77.
- 橋本俊哉 1993. 徒歩スケールの観光回遊に関する研究—飛騨高山での外国人観光者の回遊実態の分析. 観光研究 5: 11-20.
- 橋本俊哉 1996. テーマパークにおける行動特性に関する研究—東京ディズニーランドにおける回遊実態の分析. 応用社会学研究 38: 93-106.
- 橋本俊哉 1997. 「観光回遊論—観光行動の社会工学的研究」. 東京: 風間書房.
- 羽生冬佳・黒田乃生・高橋正義 2002. 白川村荻町地区における観光行動と観光対象としての集落風景に関する研究. ランドスケープ研究 65: 785-788.
- 藤田 朗・半明照三・山田雅夫・大内浩・三宅理一 2003. GPS携帯電話を用いた回遊行動の調査分析—小田原市中心市街地を事例として. 学術講演梗概集(都市計画, 建築経済・住宅問題) F-1: 855-856.

- 藤原京子 2006. エリアミュージアムとしての歴史的町並みにおける空間実態と観光行動の関係: 滋賀県長浜市を事例に. 社団法人日本建築学会学術講演梗概集 2006: 413-414.
- 古谷知之 2006. 携帯型位置情報端末を用いた観光行動動態の時空間データマイニング—箱根地域を事例として. 都市計画論文集 41: 1-6.
- 溝尾良隆 2008. 観光景観論試論(3)観光資源評価(1)客観性と視覚の問題. 地理 53(7): 76-80.
- 宮田公佳・竹内有理・安達文夫 2003. 展示改善にむけた観客調査の設計と実施—見学順路と滞在時間から見た観覧行動の解析. 国立歴史民俗博物館研究報告 108: 321-352.
- 山本泰裕・伊藤弘・小野良平・下村彰男 2006. GPS を用いた新宿御苑における利用者の行動パターンに関する研究. ランドスケープ研究 69: 601-604.
- 山村順次. 観光施設. 長谷政弘(編著) 2002. 「観光学辞典 8版」:81.